

---

# ここは幸せ一丁目

七瀬 夏葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ここは幸せ一丁目

### 【Nコード】

N5666N

### 【作者名】

七瀬 夏葵

### 【あらすじ】

新宿歌舞伎町、ゴールデン街。

そこにある小さなBAR【幸せ一丁目】。

そこには“幸せになれるカクテル”があるという。

幸せを求め、今日もお客は店を訪れる……。

## プロローグ（前書き）

オムニバス形式の小説です。

【やり直したい思い出】がテーマです。

基本的に読者のリクエストを聞いて、その希望を小説で叶える形で書いてます。

小説への出演希望、エピソードがございましたらお気軽に作者までお寄せ下さい。

## プロローグ

この街は眠らない。

欲望、栄光、挫折、愛情、憎悪。

様々なものが渦巻く、ここは新宿、歌舞伎町。

一夜にして富を築く者もいれば、一瞬で全てを失う者もいる。

ここは新宿歌舞伎町。

全てが得られ、全てが失われる街――

そんな街の一角に、小さな飲み屋街がある。

新宿ゴールデン街。

そこは欲望の街、新宿にありながら、人々の温もりが集う場所。

軒を連ねた小さな店一つ一つに、忘れかけた人の温かさが詰まっている。

【幸せ一丁目】は、そんな優しい店の連なりの中にあるBARだった。

それは、全席カウンターの小さな店。

黒を基調としたモダンな店内は、いつもしっとりした心地よいジャズが流れ、極上のカクテルを淹れるバーテンの優しい微笑みは、来る者全てを落ち着かせる。

そんな幸せ一丁目には、飲むと幸せになるカクテルがあるという。

幸せを求め、今日も客がやって来る……。

\*\*\*\*\*

<次回予告>

若さ故に人は過ちを犯す。

失った愛の大きさに今なお想いを寄せる女性。  
その愛の先にあつたものとは？

次回【ここは幸せ一丁目】

第一話「思い出の店」

次回もお楽しみに

## ブローグ（後書き）

<マスターのカクテル講座>準備編

カクテル用語

ステア<sup>||</sup>ミキシング・グラスで混ぜる事。または単にかき混ぜる事を指す。

ビルド<sup>||</sup>直接グラスで作る事を指す。

シェイク<sup>||</sup>シェーカーでシェイクする事を指す。

t s p<sup>||</sup>ティースプーン（約5ml）を指す。

d a s h<sup>||</sup>約1mlを指す。

## 第一話「思い出の店」Part・1

何でもないある日の深夜。

そろそろ客も途切れ、バーテンがグラスを拭いていたその時。

――キイイ……

静かな音を立て、木のドアが開かれた。

入ってきたのは、しっとりした雰囲気の良いスーツ姿の女性。

「こんばんは」

バーテンは微笑みを浮かべて答えた。

「いらっしゃいませ。こんばんは。お好きな席へどうぞ」

女性は真ん中の席へ腰を降ろした。

「どうぞ」

バーテンは、お通しが入った小さな器をコトリと置き、温かいお絞りを広げて差し出した。

「ありがとうございます」

柔らかな微笑みを浮かべる女性に、バーテンはにっこりと笑みを返した。

「何になさいますか？」

「ピーチフィズを」

「かしこまりました」

バーテンは頷き、席を離れていった。  
残された女性は一人物思いにふけりだす。

（ああ、こんな店に彼と来たかったな）

落ち着いた店内は、彼女が知る彼の好みにぴったりハマっているように思えたし、静かに流れるジャズも、耳障りにならず心地良かった。

「お待たせしました」

女性の前に静かにグラスが置かれた。

「ありがとうございます」

グラスに口をつけると、爽やかな甘味が口に広がった。

「美味しい！」

本当に、びっくりするほど美味しかった。

「これ、本当にただのピーチフィズ？」

女性が尋ねると、バーテンは優しい微笑みを浮かべて答えた。

「ええ。当店自慢の、幸せになれるカクテルレシピで作ったピーチ  
フィズです」

バーテンの言葉に、女性は興味深そうに尋ねた。

「幸せになれるカクテルレシピ？そんなのがあるの？」

「ええ。お客様を幸せにする魔法のレシピです」

「まあ、素敵ね」

確かに、目の前にあるカクテルはいつも飲んでいるそれよりも遙かに美味しくて、女性は幸せな気分になった。

「こんな素敵なカクテル、彼にも飲ませたかったわ」

女性は遠い目をして呟いた。

「今日はね、別れた彼と初めて逢った日なの……」

女性はふうと小さく溜息を吐くと、懐かしそうに目を細めて語りだした。

十年前、駆け落ち同然で彼氏と東京に出て来た事。

最初は一緒にいるだけで良いと思っていたのに、段々と貧乏な暮らしに堪えられなくなって来た事。

いつの間にか衝突が多くなって、ついには喧嘩別れしてしまった事……。

「あの人と初めて逢った今日、思い出の場所を一人で歩きたくなかったの」

ゴールドデン街は、二人が最後に訪れた場所。

だけど、その時行った店はもうなくて、さてどうしようかということにこの店を見付け、何となく入って来たのだと言う。

「つまらない意地はっちゃって、店を飛び出してそれっきり……ね」

女性は寂しそうに言った。

「まあ、最後の思い出の店はもうなかったけど、そのおかげでこんな美味しいカクテルが飲めたんだから、かえって良かったのかもしれないわね」

そう言って微笑む女性は、やはり何処か寂し気だった。

「ごちそうさま」

会計を済ませ、店を出ようとした。  
その時だった。

## 第一話「思い出の店」Part 2

「……っ!?!」

ふいに、目の前を白い光がふさいだ。

眩しさに思わず目を閉じる。

瞬間、ぐにやり、と身体が揺れるような感覚に襲われる。

ふらり、と足元をとられそうになり、思わず後ろへ倒れ込んだ。

「おっと、どうしたんだよ?もう酔ったのか?」

(えっ!?!?)

耳を疑った。

(この声は……!?)

思わず勢いよく後ろを振り返った。

「け、健治!!」

有り得ない事だった。

そこにいたのは、紛れも無くあの時の彼!!

「お前、大丈夫か?カオ、真っ青だぞ?」

(だって、信じられない!)

彼がこんなところにいるはずがない。

(だって、さっきまで一人で……)

それだけではない。周りの景色すら違っていた。確かにドアを開けた筈なのに、そこは外ではなく、勿論今までいた店内でもない。

そこは紛れも無く『あの時』の『あの店』の前だった!!

訳もわからず、女性はぽかんとそこに立ち尽くした。

「気分悪いのか？今からでも帰ろつか？」

自分を心配する優しい彼の目がそこにある。信じられない。

自分は夢を見ているのだろうか。

(夢でもいい!!)

彼の胸に飛び込んだ。

「健治！健治！健治！健治い!!!」

わっと感情の渦が押し寄せる。

何を言っているのかわからなかった。

ただ、彼の胸にすがりついて泣いた。

「恭子……」

彼の指が彼女の顎にかかる。

そして柔らかく温かい彼の唇が重ねられた。

懐かしい温もり。  
彼の、温もり。

もう、何も考えられなかった。  
痺れるような懐かしい甘さに支配されていくその中で、恭子はまた、  
真っ白な光を見た気がした……。

## 第一話「思い出の店」Part・3

「あ……………あれ？」

視界が晴れると、カウンターが目に入った。  
そこは、元いたBAR『幸せ一丁目』。

「どうしました？」

バーテンの声に、恭子はまだぼうつとしながら辺りを見回した。

（さっきまでは、夢…………？）

夢にしては、あまりにリアルな。  
まだ、あの懐かしい感触が残っているようで、恭子は唇にそっと指でなぞった。

いい、夢だった。

あの頃のままの優しい彼に会えた。

（幸せな、夢…………）

懐かしい感覚に浸りながら、グラスに残るカクテルをゆっくりと飲み干したその時だった。

……………キイ……………

静かにドアが開く音がして、恭子は思わずそちらを見た。

「……………!!」

そこにいたのは、まぎれも無くあの彼だった!

あの頃より幾分落ち着いた雰囲気、時が過ぎた事を感じさせる。

「待ったか?ごめんな」

まっすぐ恭子に向けられた瞳は、あの頃と変わらず優しくして……

(まさか!あれは、夢のはずなのに!?)

「なんだよ、記念日にここで待ち合わせしようって言ったのに遅れたから怒ってるのか?」

瞬間、恭子は彼に抱きついていて。

「お、おい、は、恥ずかしいだろ!?こんなところで……………」

慌てる彼の声を聞きながら、恭子は顔をあげてキスをした。

「愛してる……………」

カウンターの奥では、バーテンが静かに微笑んでいた。

\*\*\*\*\*

<次回予告>

女は悩んでいた。

己の愛に。愛するが故の葛藤に。

愛故の過ちに気付いた彼女を待っていたのは？

次回【ここは幸せ一丁目】

第二話「大切なもの」

お楽しみに

## 第一話「思い出の店」Part・3（後書き）

マスターのカクテル講座 第一回「ピーチフィズ」

材料：ピーチ・リキュール（45ml）、レモン果汁（1/2）、  
グレナデン・シロップ（1tsp）、ソーダ水（適量）、砂糖（  
少量）

作り方：ピーチ・リキュール、レモン・ジュース、砂糖をシェーカーに入れ、シェイクする。タンブラーに注ぎ、氷を加え、ソーダ水で満たす。

特徴：ピーチ味の爽やかなカクテル。アルコール度は低めで女性にもオススメ。

## 第二話「大切なもの」Part・1

ここは幸せ一丁目。

新宿ゴールデン街にある小さなBAR。

今日もこの店に、幸せを求め、客が訪れる。

キイ

ドアを開けて入ってきたのは、とても疲れた顔をした女性だった。

「いらっしゃいませ」

いちばん手前奥、窓際の席に腰を降ろした女性に、バーテンは優しくお絞りを渡した。

「なんにいたしましたしょう?」

お通しの小さな器をそつと女性の前に置いて尋ねた。

「そうね。何か元気の出るやつを頂戴」

「かしこまりました。お客様、トマトはお嫌いですか?」

「トマト?いいえ、トマトは大好きよ」

それを聞くと、につこりと頷いてバーテンはカクテルを作り始めた。しばらくしてバーテンが戻ってくると、赤い飲み物が入ったグラスを女性に差し出した。

「お待たせしました」

「なあにこれ？」

女性が訝しげに尋ねると、バーテンはにっこりと微笑んで言った。

「レッド・アイです。 トマトジュースを使ったカクテルになりま  
す」

「トマトジュース？そんなカクテルあるのね」

女性は珍し気に目をしばたかせ、恐る恐る口に運んでみる。

「あら、美味しい！」

トマトジュースと聞いてちょっと野菜臭い味を想像していたのに、  
目の前の赤い飲み物はちっとも臭みが無く、爽やかな甘味すら感じ  
られた。

「こんなの初めてよ。すごく美味しいわ」

幾分明るい表情になった女性に、バーテンは話し掛けた。

「お疲れの様子でしたから、当店自慢の特別な幸せになるカクテ  
ルレシピでお作りしました」

それを聞いて、女性は目に涙を浮かべた。

「幸せかあ」

(アタシの幸せは、何処で壊れちゃったのかなあ)

女性は、自分の過去をぼんやり思い返していた。

(そつだ。あのとき)

まだ自分がこんなに疲れる生活になる前、幸せだと感じていた最後のときは、あの店だった。

(あのとき彼にお金を出さなければ)

女性にはずっと付き合っている彼氏がいた。

今では自分に頼りきりでまるつきりヒモ状態だが、あのときまではきちんとしていた。

そのことを思い出し、悲しくなった。

「はあ」

長い溜息の後、女性は目の前のカクテルを飲み干した。

(美味しい)

美味しいカクテルが、また少しだけ気分を明るくしてくれた。

「美味しかったわ。もう一杯もらえる？」

「気に入って頂けたようですね。ありがとうございます」

バーテンはにっこり笑ってまたカクテルを作り始めた。

ほどなくしてカクテルは出来上がり、女性はまたそれを飲み干した。

そして次々にカクテルを注文してはグラスを空けていった。  
暫くそうして飲んでいるうち、女性は溜まった疲れもあってウトウトとしたし、ついにはカウンターで突っ伏して眠り始めてしまった。

## 第二話「大切なもの」Part・2

「まこ、まことー！」

急に肩を揺すられ、女性は目を覚ました。

（あれ？ここは　　）

気が付くとそこはBARではなく、明るいカフェレストランだった。

「どうしたんだよまこ、こんなところで寝ちゃって。疲れてんのか？」

まこと呼ぶその男性は、女性の付き合っている彼氏だった。  
しかし何処かおかしい。

（なんか、微妙に若いような気がする　　）

女性、真はハツとして周りを見た。

（ここは、あときの店　　）

それは、真の彼氏が初めて真にお金を出させたあのカフェだった。

（まさか　　）

携帯電話のディスプレイを見ると、『5月10日（日）（PM1：15』と表示されていた。

（ウソッ！これ　　あの日だー！じゃあ、まさかここ・・・）

真は、自分があの日のある場所にいる事が解り、信じられない思いだった。

「なあ、そろそろ出ないか」

彼が言った。

真には、この次彼が何を言うのかもわかってる。

「あ、そうだ！悪い、今日じつはお金少なくてさ、まこ、俺の分も払ってくんないかな」

お願い！

と、彼は真の前で手を合わせる。

そんな彼に、真は静かに話し出した。

「ねえ俊ちゃん、アタシね、俊ちゃんのこと大好きだよ」

真の言葉に、彼、俊一は顔をあげた。真は彼の目をまっすぐ見つめて続ける。

「だからね、お金は出せないよ。俊ちゃんのこと、嫌になりたくないから。ずっと素敵な自慢の彼氏でいて欲しいから」

「まこ」  
「？」

俊一は目を丸くして真を見た。

「ごめんね俊ちゃん、アタシ、本当に大切なものは何なのか気付い

ちゃったの。甘やかすだけが、愛じゃないんだよね。だから

「

さよなら

真はその場から立ち去った。

後ろから俊一の叫ぶ声が聞こえても、構わずスタスタと歩いた。出口に向かって。

カフェの扉に手を掛け、外に足を踏み出したそのときだった。視界が真っ白になり、真は光に包まれた。

（なにこれ　　！）

光の中、真の意識はすうっと薄れていった……。

## 第二話「大切なもの」Part・3

「お客様、お客様？」

気が付くと、バーテンが真の肩を優しく叩いていた。

「気がつかれましたか？」

そこはあのカフェではなく、元いたBAR『幸せ一丁目』だった。

「よくお休みになられていたので悪いかと思いましたが、そろそろ始発の出る時間ですので」

時計を見ると、もう五時を過ぎていた。

（一晩中寝ちゃってたのか）

ふと見ると、肩には膝掛けがかけてあった。

「冷えるといけないと思ひまして」

バーテンが優しく微笑んだ。

「ありがとうございます。ごめんなさい、お世話になったわね」

真は恥ずかしそうに膝掛けをバーテンに手渡した。

「お会計お願いします」

真は、バーテンに料金を払い、深々とお辞儀をして出て行った。店を出た後、真は眩しい朝日に瞬きしながら背伸びをした。

「ん〜！いい天気！！」

それにしても妙な夢を見たものだ。

（あの日に戻ってやり直すなんて、出来っこないのに　　）

それでも、何故か真は、胸のつかえがとれたようにスッキリした気持ちになっっていた。

（頑張ってみようかな！）

今度彼に会ったら、今度こそあの夢のようにハッキリ断ろう。そう思いながら向かった駅のホームで、真は思いがけない人に会った。

（俊ちゃんだ！！）

真が彼を見付けると、彼も真を見付け、こちらに駆け寄ってきた。

「久しぶりだな！！どうしたこんな朝早くに？」

俊ちゃんこと、俊一はニコニコとまことに話し掛けた。

（久しぶり、なんて白々しい。昨日もアタシにお金せびりに来たくせに）

真はちょっと頭にきて不機嫌に答えた。

「ああ、今仕事終わったとこだよ」

すると俊一の顔が驚きに変わる。

「こんな時間まで仕事？無理すんなよ、まこの一人くらい、俺が養えるんだからさ」

「えっ」

真は驚いて俊一を見た。

俊一はそんな真の手をとり、指にはめられた指輪を撫でた。

「この婚約指輪に誓って、まこのこと守ってくからさ」

真は信じられない思いで自分の指を見つめ、そこに確かに嵌められた銀の指輪を見た。

そして、彼の瞳に宿る優しい光に気付き、思わず抱きついた。

「俊ちゃん!!」

「まこ、おい、どうしたんだよ、急に」

戸惑いながら、嬉しそうに照れ笑いする俊一を見て、真は感激に打ち震えた。

（あの夢は夢じゃなかったんだ！）

俊一はもう、結婚どころか仕事もせず、真に金をせびるような男ではない。

真は、本当の幸せを掴んだのだった。

その頃幸せ一丁目では、バーテンがグラスを片付けながら先刻の女性客の事を思い出していた。

（可愛い人だったな　　）

ガシャン！！

ポーツとして、グラスを落としてしまった。

（しまった　　）

ここは幸せ一丁目。

幸せになれるカクテルを出すお店。

優しいバーテンが、きつとアナタにピッタリの美味しいカクテルを入れてくれることだろう。

特に女性のアナタには　　。

\*\*\*\*\*

< 次回予告 >

男は、冷徹無非な凄腕殺し屋だった。

無垢な魂が凍てつく心に触れた時、男は何を思ったのか……。

次回【ここは幸せ一丁目】第三話「殺し屋」

お楽しみに

## 第二話「大切なもの」Part・3（後書き）

マスターのカクテル講座 第二回「レッドアイ」

材料：ビール、トマトジュース。（各同量で）

作り方：よく冷やしたグラスに冷えたトマトジュースを注ぐ。冷やしたビールを注ぎ、軽くステアする。

特徴：レッド・アイとは二日酔いの赤い目の意。迎え酒や風呂上がりにピッタリのヘルシーカクテル。素材の味が決め手なので、トマトにこだわって作るバーテンもいるとか。

### 第三話「殺し屋」Part・1

「今日はよく降る日ですねえ」

BAR『幸せ一丁目』のバーテンは、降りしきる雨音に一人呟いた。こんな雨の日はさすがに客足が遠のくらしく、バーテンは一人寂しくグラスを磨いていた。

（お客さんも来ないし、休憩がてらご飯でも作ろうかな）

バーテンが奥のキッチンへ足を向けたその時だった。

キィ。

扉が開き、一人の男が入って来た。

「いらっしやませ」

見ると、男は黒い帽子を目深に被り、顔にはサングラス、黒のジャケットに赤いシャツ、スラリとした黒のパンツに、足元には黒いソックス、そして大きな黒い革靴という出立ちだった。

雨に濡れたのであろう男の赤いシャツは、肌にしつとりと張り付き、服の下にあるであろう男の強靱な肉体を、微かに感じさせていた。

そんな男の姿を見て、バーテンはすぐに彼が何者か気付いていたが、別段表情を変えるでもなく、いつものとおりお客が席に着くのを待っていた。

男は、入口からいちばん近い席に腰を降ろした。

バーテンはいつも何も変わらず、すぐに男に温かいお絞りを差し出した。

「何になさいますか？」

男は、静かに口を開いた。

「ジャック・ダニエル ソーダ割りをくれ」

「かしこまりました」

バーテンは手早くカクテルを作り、男の前に差し出した。

「お待たせしました」

男は、黙ってそれを手にとり口をつけた。

男が飲むその酒は、遠いテネシーを思わせるような琥珀色。

その味わいには、やり直す事は出来ない遠い過去を思い出させる様な切なさを覚えるほろ苦さがあった。

「お客様、ジャケット、お預かりしましょうか？」

酒を飲み、物思いにふけていた男は、バーテンの声に無言で首を振った。

しかし、ややしてある事に気づきバーテンを見た。

「おいあなた、何で帽子は預かるつかと聞かない？」

普通なら、こんな濡れた状態で、ジャケットだけを預かりましょうかと聞くのはおかしい。

帽子も預かるうかと聞かれそうなものだ。

なのに、このバーテンはそれをしない。それが妙に引っ掛かった。

するとバーテンは、何でもない事のようにさらりとこう答えた。

「お客様は、それを人前で脱ぐ事はお嫌いだと思ったものですから」

男は驚きを隠せなかった。

なぜこのバーテンがそんな事を知っているのか。

確かに男は、人前でそれを脱ぐのを嫌っていた。

ある理由があつたからだ。

男は、目の前のこのバーテンがどうしてそれを知っているのか、どうしても確かめたくなつた。

「いや、アンタにならいいさ」

言つて、男はサングラスを外し、帽子を脱いだ。

そこに現れたのは、燃えるような赤い瞳と髪だった。

男はバーテンを見つめていたが、バーテンは特に表情を変える事もなく、相変わらず穏やかな微笑を浮かべ、男の前にたつていた。

「俺が誰だか、アンタは知ってるんじゃないのか？俺は アカハチだぞ？」

男は核心をついた。

『アカハチ』

それは、裏の世界で知らぬ者はいないと噂される真紅の瞳と髪を持つ凄腕の殺し屋。

その名を知る者なら、誰もが恐れ慄く。<sup>おのの</sup>

それなのに、そんな男の正体を知っているような振舞を見せながら、バーテンは全く怯える気配が無い。

それどころか、なお穏やかに微笑んでこう言った。

「お客様が誰で、どんな仕事をなさっていても、私にはお客様であることに変わりございませんから」

アカハチは驚きに面食らいながら複雑な笑みを浮かべた。

「まいったな。俺の正体を知ってて態度が変わらなかつたのは、アంతで二人目だ」

そう。これまでは男があゝの殺し屋アカハチだと知れば、誰もが震え逃げ出した。

たった一人を除いては。

男は、久し振りにそのたった一人のことを思い出していた。

### 第三話「殺し屋」Part・2

12年前、S国。

同盟国の裏切りにより、この国はまさに激しい戦争の最中であった。そんな中、アカハチは特殊部隊でもよりすぐりのエリート隊員として、日々要人暗殺を請け負っていた。毎日毎日、殺戮の血にまみれるうち、アカハチはだんだんと人の心を保てなくなっていくた。

そんなある日のこと。

ちよつとした油断から、アカハチは瀕死の重傷を負ってしまった。逃げ込んだのは、町外れの小さな教会。ズルズルと痛む脚を引きずるようにして進んだが、キリスト像の前でついに力尽きてしまった。

(もうだめか　　)

アカハチは、意識が遠くなるのを感じた。

(・・・ここ・・・は・・・?)

気がつくと、目の前に白い天井があった。

「うっ！！」

動こうとすると、右脚に激痛が走る。

「あつ、だめよ動いちゃ！」

修道服を着た女性が駆け寄って来た。

「シスター？俺は一体」

「あなた礼拝堂で倒れてたのよ。まったくあの怪我でよく死ななかつたもんだわ。運がいいわよアナタ」

ケラケラと可笑し<sup>おか</sup>そうに笑った。

「アンタおかしな女だな。普通シスターならこういうとき、神の加護、とかなんとか言うんじゃないのか？」

「あら、だってあたしシスターじゃないもの」

「え？」

「あたしね、小さい頃日本から医者のお両親に連れられて来られたの」

彼女は語った。

両親が二人とも兵隊に殺されてしまった事。

それからずっと修道院でお世話になっているのだという事。

「シスターなんてガラじゃないしね！」

そう言ってほがらかに笑った。

「アンタ、名前は？」

「美和よ」

「ミア？」

すると彼女はふうと小さく溜息をつき、ベッドサイドにあった紙とペンで何やら文字を書いた。

「日本の文字でね、こう書くの」

彼女の書いた文字は知らない異国の文字で、アカハチには読めなかった。

「私の国の言葉でね、美しく平和について意味でつけられたんだって」

美しく、平和。

その意味は、目の前の彼女によく似合っているような気がした。

「美和って、この国の人に発音は難しいわよね。いいわ、ミアで許してあげる」

そう言って笑った。

これが彼女、『ミア』との出会いだっただ。

### 第三話「殺し屋」Part・3

ミアはいつも明るく、そして優しくかった。

そんなミアに看病されるうち、アカハチは自分が失いかけた人間らしさを取り戻していくような気がした。

アカハチはどんどんミアに惹かれていった。

そして、ミアもまた、アカハチの不器用な優しさに惹かれていった。二人はやがて愛し合うようになっていた。

だが。

(俺は所詮殺し屋だ。ミアとは生きる世界が違う)

怪我が治り、アカハチはもうこれ以上ここにはいられないと、こっそり修道院を抜け出そうとした。

ところが。

「アカハチ!!」

ミアが、アカハチがいない事に気付き追いかけてきた。

「来るなミア!俺は、お前とは生きる世界が違うんだ!俺は 殺し屋なんだぞ!!」

「知ってるよ!!」

ミアは、アカハチを探しに来た特殊部隊の人間から、アカハチの正体を聞かされていたのだった。

「あたしは、アンタが殺し屋だって関係ない!!あたしはアンタを

「

ミアは、涙をボロボロ零しながら夢中で叫んだ。

「愛してるの!!」

行かないで。

アカハチは、そんなミアを見て心が揺らいだ。

だが、自分とあれば、彼女は確実に暗殺の黒い影に付き纏われる。

アカハチは、必死に思いを振り切った。

「ミア、すまない」

「アカハチいいー!!!!」

ミアの悲痛な叫びを残して、アカハチは部隊へ戻った。

以来、彼女とは一度も会ってはいない。

アカハチ、生涯唯一の、愛であった……。

### 第三話「殺し屋」Part・4

カラン。

溶けた氷が鳴った。

アカハチは、昔の苦い思い出に思いを馳せ、胸を痛めた。

（もう、取り返しもつかないのにな　　）

アカハチは目を瞑り、グラスに残った酒を一息に煽った。グラスを乱暴に置き、目を開けたそのときだった。

「アカハチ！！」

（　　えっ！？　　）

懐かしい声がした。  
振り返ったアカハチの目の前には何と、あの愛しいミアが立っていた！

「アタシ、あんたを　　」

昔のまま、何も変わらない姿の彼女がそこにいる。  
間違いない。目の前にいるのは、あの時のミアだった。

「愛してるのー！！」

「ミアッ！！！！」

アカハチは走った！彼女の元へ！！

「ミア！！」

（夢なら、醒めないでくれ　　！！）

アカハチは、愛しいミアを抱き締めた。  
そして、ずっと言えなかった言葉を口にする。

「愛してる　　」

もう離さない！！

アカハチは、ミアを強く抱き締め目を閉じた。  
その瞬間、

グラリ・・・！！

地面が揺れた気がした。

（なんだ　　！？）

ユラリ

目の前の視界が歪む。  
抱き締めているはずのミアの感触が薄れていく。

「嫌だ！ミア！！ミアーーーー！！」

アカ八千の視界は歪み、世界は眩しい光に包まれいった・・・。

### 第三話「殺し屋」Part・5

気がつくとアカハチは、カウンターの椅子に座っていた。

手の中のグラスは、すっかり氷が溶けている。

(夢　　?)

アカハチは自分の手を見た。

今の今、確かに抱き締めていたあの感触。

あれが夢なら、なんとリアルな夢だろう。

アカハチが夢の感触を惜しんでいたその時だった。

「どうしたの？」

隣から声がした。

「　　っ!!!」

そこには、あの最愛の人が座っていた。

あの頃より確実に大人びた顔で、アカハチの顔を覗き込んでいる。

「ミアッ!!!」

「ちよっ、どうしたのアカハチ、苦しいよ」

アカハチは抱き締めた。

今度こそ本当にそこにいる彼女を。

そんな様子を見ながら、バーテンはいつものように静かに微笑んでいた。

雨はもう、すっかりあがっていた。

ここは幸せ一丁目。

幸せになれるカクテルを出すお店。

今日も店には、幸せが溢れている。

\*\*\*\*\*

< 次回予告 >

人は失って初めて本当に大切なものに気付く。  
忘れ得ぬ恋に悩む彼女がたどり着いた結末は……？

次回【ここは幸せ一丁目】第四話「トモダチ」

お楽しみに

### 第三話「殺し屋」Part・5（後書き）

＜マスターのカクテル講座＞第3回「ジャックダニエル・ソーダ割り」

材料：ジャックダニエル、ソーダ。（各適量）

作り方：オールドファッションド・グラスに氷を入れる。ジャックダニエルを注ぐ。ソーダを注ぐ。軽くステアする。

特徴：ジャックダニエルはテネシー州で造られたテネシー・ウイスキー。樽から引き出された美しい琥珀色と芳醇な味わいは目と舌を同時に楽しませてくれる逸品。アルコール度はかなり高め。酒に慣れた大人の男性にオススメ。

#### 第四話「友達」Part・1

大人になんてなりたくなかった。

ずっと無邪気な子供のままでいられたら、こんなに辛い恋もしなくて済んだのに。

女子大生のメイは、瞬く星空を見上げながら物憂げに溜め息を吐いた。

星空、と言つても、新宿のそれは都会のスモッグの所為か、今は薄ぼんやりとしか伺うことが出来ない。

(まるであたしの心みたい)

ネオン輝く新宿の街の中で輝けない星に自分を重ね、さらに溜息を吐いたその時だった。

ドンツ！！

「キャツ！！」

突然の衝撃に、メイは勢いよく後ろに倒れ込んだ。

「あいたたた」

したたかに打ち付けたお尻がズキズキ痛む。

一体何が起つたというのか？

メイは痛みに眉をしかめながら前を見た。

「ごめんなさい！大丈夫ですか！？」

若い男が、心配そうに覗き込んでいる。

(黒服に、蝶ネクタイ ？)

この辺りの店の者だろうか。

新宿歌舞伎町という場所柄、そんな服装は特に珍しく無い。しかし、歌舞伎町が初めてのメイはしげしげと男を見つめた。

「大丈夫？立てますか？」

差し延べられた手を握り、なんとか立ち上がると、男はなおも心配そうにこちらを見た。

「本当にごめんなさい、何処か痛くないですか？」

メイはまだズキズキするお尻をさすりながら、それでも出来るだけ平常を装い答えた。

「大丈夫ですよ。ブーツとしてたあたしもいけないんで、気にしないで下さい」

言って手を振ったメイだったが。

「あ！血が出てるじゃないですか！！」

言われて見ると、手の平が少し擦り剥いている。

「これくらい……っう！」

平気だと言おうとしたものの、滲む血を認識した途端にズキンと痛みが襲って来た。

思わず顔をしかめていると、男はさきほどより更に申し訳なさそうな顔になった。

「ごめんなさい、すぐ近くに私の店があるんです。よかつたら傷の手当てさせて下さい！」

男の申し出に少し驚いたが、傷口はジンジン痛むし、目の前には心配そうな顔がある。

メイは素直にその申し出を受けることにした。

連れてこられた先は、歌舞伎町の先にある小さなBARだった。

「ちょっと待ってて下さいね。すぐ傷薬持ってきますから」

男は慌てて奥に引っ込んでいった。残されたメイは落ち着かない様子であたりを見回す。

店内はさほど広くはなく、幾つかある椅子は、長いカウンターの前に整然と並んでいる。

カウンターの中の棚には、たくさんきれいなビンや、ピカピカに磨かれたグラスが並んでいる。

メイは、物珍しくそれらを眺めていた。

「ごめんなさい、薬持ってきたんで、傷見せて頂けますか？」

薬箱を抱え戻ってきた男に、メイは素直に手を差し出した。

「ちょっと染みるかもしれませんがよ」

消毒液を染み込ませた脱脂綿を傷口に当てた。

「うっ!!」

構えていても、やはり薬は傷に染みてしまい、メイは痛みに顔をしかめた。

「ああっ、ごめんなさい、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫です。続けて下さい」

メイの言葉に、男は少し躊躇いながらもテキパキと手当を進めていった。

傷口に薬を塗り、大き目の絆創膏を貼り付ける。

「ふう。終わりましたよ。お疲れ様でした」

「どうもありがとうございました」

お礼を言い、帰ろうとするメイを男が引き留めた。

「あ、ちょっと待って。お詫びに何かお好きな物を一杯奢らせて下さいませんか？」

「でも、悪いですよ」

遠慮するメイに、男は優しい微笑みを浮かべた。

「遠慮しないで。あなたのお好きなものをお作りしますよ。お酒がダメなら、ノンアルコールでも作れますよ？当店とっておきの、幸

せになれるカクテルレシピ」でね

そう言っただけで「こり」と笑った。

## 第四話「友達」Part・2

(幸せになれるカクテルレシピ?)

その言葉に、メイの気持ちは引きつけられた。

「それって、どんなのですか?」

「飲んでみればわかりますよ」

男の優しい微笑みに、メイはなんだか心が和んだ。

「じゃあ、デイタグレープお願いします」

メイは、いちばん好きなカクテルを注文することにした。

というより、メイはカクテルといえばそれしか知らなかった。

メイが初めてそれを飲んだのは、大学の新入生歓迎会だった。

初めての宴、初めてのお酒。

メイはつい飲み過ぎてしまい、幼馴染みのマサルに介抱されるハメになった。

そしてそのあと。

(アイツに告白されたんだっけ)

思い出して、メイは少し切なくなった。

あの時、メイは思わずマサルから逃げてしまった。

怖くなったのだ。

ずっと知ってたはずのマサルが、突然別の、見知らぬ男みたいに思えて。

それから3カ月、メイはマサルの顔を見る度なんだか恥ずかしくて、避けてしまった。

そしてマサルは、メイから離れていった。今はもう、マサルの隣りに自分はいない。そこにいるのは、メイのクラスのコカ。

マサルの、彼女。

(あそこはずっと、私の場所だったのに)

メイは悔やんだ。

こうなつて初めて、自分がマサルを好きだったことに気付いたのだ。

「お待たせしました」

男が、白いカクテルグラスをメイの前に差し出した。メイは我に返り男を見た。

「ありがとうございます。それじゃ、頂きます」

見た目は普通のグレープフルーツジュースなのだけれど。

口をつけると、さっぱりとした何とも言えない爽やかな酸味と甘味が口いっぱい広がった。

「うわあ、なにこれ！？凄い美味しい！！」

それは、普通のグレープフルーツジュースとも、あのと飲んだデイトグレープとも違っていた。

口にする度、不思議な幸福感に満たされるような気さえする。  
メイは、さつきまでの切ない気持ちも忘れ、ウキウキした気分でグラスを空けた。

「ご馳走さま。とっても美味しかったです」

メイは、ニコニコ笑顔で男に会釈した。

「確かに幸せになれる味でした」

すると男は微笑んでこう言った。

「ありがとうございます。でも、幸せになれるカクテルの効果は、もう一つあるんですよ。ちょっと目を瞑ってみてください」

「目を？」

「ええ。きっと素敵なことがありますよ」

そう言って、男はにっこりと笑った。

#### 第四話「友達」Part 3

(素敵なこと?)

メイが半信半疑で目を閉じたその時。

「メイ!おい、メイ!」

(この声は)

「マサル!?!」

目を開けると、そこにはなんと、マサルが立っていた!

「え!?!な、なんで?!」

訳が分からず、メイはマサルを呆然と見つめた。

「なんでって、お前さっき潰れただろ?大変だったんだぞ、ここま  
で運ぶの」

マサルの言葉に、メイは驚いて周りを見た。

そこは間違いなくメイのアパートのベッドの上だった。

(うそ　!?!)

メイは、部屋にある日めくりカレンダーをみて声を失った。

それは、間違いなくあの告白の日だった!!

どうしてか分からないが、これがあの日の自分の部屋だとすると、

もうすぐあの忘れられない出来事が起こるはず。  
メイはごくりと唾を飲んだ。

「大丈夫かよ、メイ？」

緊張のあまり額に汗を浮かべたメイを見て、マサルは心配そうに問い掛けた。

「まだ気分悪いのか？水持ってこようか？」

「だ、大丈夫！」

メイは慌てて答えた。

「ならいいけど」

マサルはじつとメイを見つめている。

緊張で胸が張り裂けそうになる。

メイは、思わず目を逸して口元に手をやった。  
二人の間に重い沈黙が流れる。

「あのさ、メイ」

沈黙を打破り、マサルが口を開く。

「俺さ、俺」

言い淀むマサルに、メイは息を飲み、顔を上げた。

「お前が好きだ！」

「……………」

心臓が別の生き物のように脈打っているのがわかる。

わかっていたはずなのに、いざその言葉を聞くと、メイはやっぱり動揺を隠せなかった。

「メイ、お前は俺のこと、どう思ってるんだよ？」

「あ、あたしは……………」

言葉が出ない。

もし戻れたなら、絶対自分も好きだと言いたいと思っていたはずなのに。

メイは焦りながらマサルを見た。

「なんとか言ってくれよ！」

マサルの叫びに、メイは更に焦る。

必死で声を出そうとするのに、出て来るのは「あ……………」とかいう呻き声みtainなものばかり。

「自分も好きだ」という一言が出てこない。

そんなメイを見て、マサルはふうーっと大きな溜息を吐いた。

「わかったよ、もういい」

突然悪かったな、と、優しく頭を撫で、ぎこちない笑みを浮かべた。

「帰るよ」

ごめんな。

消え入りそうな声で拳を握る。

泣きそうな時の、マサルの癖だと、ずっと前から知っていた。ずっと前から、マサルを見てたから。

楽しい時も悲しい時も、いつだってマサルと一緒にだった。

背を向け、歩きだすマサルが目に入る。

(行ってしまっ！)

もう一緒にはいられない。

どんなに悔やんでも。

(そんな日々を、あたしはまた、繰り返すの?)

マサルがドアノブに手をかけた、その瞬間

「行かないで！」

声が出た。ベッドから身を乗り出して叫ぶ。

「あたしもマサルが好きだから!!」

マサルが走って来る。

「メイ!!」

ぎゅっと抱き締める。

「メイ、ほんとか?!!」

「うん!!ほんとはあたし、マサルのこと、めちゃめちゃ好き!!」

「メイ!!」

マサルの顔が近づく。

メイは、静かに目を閉じた……。

#### 第四話「友達」Part・4

グレープフルーツの良い匂いがする。

（香水なんかつけてたっけ？）

ぼんやり思ったそのときだった。

「もしもし」

声がした。

ハッと目を開けると見知らぬ男がこちらを見つめていた。

「大丈夫ですか？」

「あれ？ここは」

辺りを見回すメイに、男は微笑んで答えた。

「気がつかれましたか？ここは私の店ですよ」

その言葉で、ようやく記憶が繋がった。

（ああ、ここはあの店か）

ぶつかったお詫びにカクテルをご馳走になって、その後潰れてしまったのだらう。

さきほどまでの事は夢だったのだとガツカリした。

それにしても、まさか知らない人の前で飲んで潰れてしまうとは。

メイは思わず顔を赤らめた。

「ごめんなさい、アタシ、寝ちゃったんですね」

すると男は申し訳なさそうに言った。

「すみません、まさかそんなに弱いとは思わなくて・・・」

アルコールもつと少なくすればよかったですね、と男は申し訳なさそうな顔をした。

「いえ、私が悪いんです。弱いくせにカクテルお願いしちゃったから。ご迷惑かけてごめんなさい」

メイは深々と頭を下げた。

P i r r i r r i

電話が鳴った。

「あ、ちよつとごめんなさい」

メイは慌てて電話を取った。

『もしもし！今どこ？』

マサルだった。

「え？その、歌舞伎町だけど

」

メイが答えると、マサルは詳しい場所を聞いてきた。どうやら近くにいららしい。

『そこ、動くなよ!』

ツーツー

切れた。

(急にどうしたんだろう?)

これまでは連絡なんて全然してこなかったのに。メイが首を傾げていると、ややしてボタンとドアが開く音がした。

「メイ!」

マサルが立っていた。

「マサル! どうしたの?」

「メイの友達に聞いて歌舞伎町探してたんだよ! 全く、いくら喧嘩したからって、一人でホストクラブに行こうとするなんて危ないだろ!? それに……」

俺という彼氏がいるのにさ、と、すねたように呟くマサルに、メイは思わず耳を疑った。

「彼氏!?! マサルが?」

思わず叫んだ。

「そりゃないだろ」

マサルはガツクリ肩を落とした。

「もう俺、彼氏じゃなくなってるわけ？うつかり記念日忘れたからって、そりゃあんまりだろ」

訳が分からず、メイはマサルに尋ねる。

「あの 記念日って？」

「俺たちの交際三か月記念日だろ？忘れて悪かったよ！ごめん！許して！」

(交際三か月？じゃあ、まさか)

「ねえマサル、あの新入生歓迎会の日、あたし、マサルに好きって言えなかったよね？」

「うわ！何それ！？ひどいなあ、もしかして言わなかったことにしたいの？やだよ、勘弁してよ！来月は絶対埋め合わせするから許して！ね！お願い！！」

焦って謝り倒すマサルに、メイは思わず呟いた。

「夢じゃ、なかったんだ」

「え、なに？」

マサルが顔を上げこちらを見た。

「マサル!!」

メイは、マサルの胸に飛び込んでいた。

「大好き!!」

背伸びしてキスした。

これからは友達じゃない二人の時間が待っている事だろう。

一部始終を見ていた店の男は、穏やかな笑みで二人を心から祝福した。

爽やかなキスシーンに、レモンのように甘酸っぱい初恋の味を思い出しながら……。

\*\*\*\*\*

< 次回予告 >

平凡な主婦の幸せは、ある光景を見た瞬間に砕け散った。

かつて自分が選んだ選択に思いを馳せる彼女に起こった不思議な出来事とは？

次回【ここは幸せ一丁目】第五話「夫婦」

幸せはいつも、あなたの心の中に……。

## 第四話「友達」Part・4（後書き）

マスターのカクテル講座 第四回「デिता・グレープ」

材料：デिता・ライチ（30ml）、グレープフルーツジュース（適量）

作り方：氷を入れたタンブラーにデिता・ライチを注ぐ。グレープフルーツ・ジュースを注ぐ。軽くステアする。あればレモン・スライスを添えて。

特徴：デिता・ライチはライチのリキュール。少量でも甘く深い香りが損なう事なく発揮される。グレープフルーツ・ジュースとの抜群の相性で、飽きのこない上品な味わいが楽しめる。甘く爽やかな口当たりは女性も飲みやすいが、美味しく飲んで飲みすぎないように注意。

## 第五話「夫婦」Part・1

奏子そうこは普通の主婦だ。大学一年の秋に幼馴染の大知だいちからプロポーズされ、電撃結婚した。それからもう12年。子供にも恵まれ、それなりに幸せな時を過ごしている。共働きではあるが貧しくもなく、優しい旦那と可愛い息子と3人、明るく平和な家庭で、何の不安も無かった。

今年で小学5年になる息子、和樹かずきは利発で、この頃は会社から帰る頃には晩御飯の支度をして待っていてくれる。奏子はとても幸せで、何も不満はなかった。

ある光景を見るまでは。

その日、少しだけ早く仕事を切り上げた奏子は、街中にある大きな宝石店を通りかかった。

(あら？あれ、あの人じゃないかしら)

夫である大知らしき男性が店内にいるのを見て、奏子は思わず店に入りかけ、ぴたりと足を止めた。

(っ!?)

それは、確かに大知だった。

来ているスーツも、ネクタイも、確かに今朝奏子が大知に出してあげたものだったし、何より見なれた愛する夫の顔を見間違える筈もない。

しかし、奏子は声をかける事なく、足早にその場から立ち去った。

「はあはあはあ……………」

思わずめちやくちやに走って来た奏子は、大きな公園のベンチにぐったりと座り込み、息を整えながら、先程見た光景を思い返した。あれは確かに大知だった。そして、その隣にいたのは……………。

「あれは、誰？」

大知の隣には、見知らぬ女性がいた。若く、可愛らしい女性が、笑っていた。

女性の方は私服だったから、仕事関係とは思えない。

プライベートな付き合い。それも、親密な。

女性が手にした宝石を見て、照れ笑いを浮かべていた大知。

あんな夫の姿を、奏子はしばらく見た事がなかった。

「どうして……………」

自分がもう若くないから？母親になってしまったから？知らず、涙が溢れた。

「大知……………」

夫の名を呟き、ひとしきり泣いた後も、ボーっとその場に座ったまま動けなかった。

公園がライトアップされ始め、カップルが集まり出す頃、奏子はようやく腰を上げ、思い立ったように駅に向かった。

そのまま歩きながら携帯電話で自宅へと電話をかける。

「もしもし和樹？ママ、今日は遅くなるけど、一人でご飯大丈夫？」

『うん大丈夫。パパもきつともうすぐ帰ると思うし、平気だよ』

健気に笑う息子を思うと胸が痛んだ。しかし、このまま家に帰って夫と顔を合わせる勇氣は無い。今会えば、息子の前でも構わず問い詰めてしまいそうで……。

奏子は、「お仕事頑張つてね」と電話を切った息子に心の中で詫びながら、今夜は少しだけ飲んで帰ろう、と思うのだった。

駅に着いた奏子は、電車を乗り継ぎ、新宿へと向かった。

結婚前、大知と二人でよく行ったお店が確か、新宿のゴールデン街にあつた筈だ。

記憶を頼りに、奏子はその店を探した。

「無いわね……」

あちこち探して回ったが、どうも、記憶にあつた店はもう無くなつてしまつたようだ。

仕方ない、この際どこでもいいか。そう思い、目の前にあつた店の扉を開けた。

「いらつしゃいませ」

黒服のバーテンが、グラスを磨きながら笑顔で出迎えてくれた。

そこは、カウンター席しかない小さな店だった。

静かに流れるジャズが耳に心地よい、どこかほっとするような店内の空気に、奏子は緊張を解き、バーテンの真正面にある真ん中の席に腰を下ろした。

「どうぞ」

温かいおしぼりとお通しの小さな器が差し出された。

「ありがとう」

奏子は受け取ったおしぼりで手を拭くと、ふう〜つと大きな溜め息を吐いた。

「あの、何か甘くて、ちょっと高級感があるようなカクテルってありますか？」

「甘くて、高級感がある物ですね。少々お待ち下さい」

バーテンはすぐに二つの瓶と生クリームの入ったパックを取り出し、氷と共にシェイカーへと入れて振り始めた。

リズムカルにシェイクする音が響き、やがて綺麗に磨かれた逆三角形のグラスにその中身が静かに注がれたかと思うと、サツと何かの粉が振りかけられ、奏子の前にコトリと置かれた。

「どうぞ」

それは、薄い琥珀色と乳白色を混ぜたような色のカクテルだった。

中央に茶色の粉がちょこんと乗っている。

初めて見るそのカクテルに、奏子はおそるおそる口をつけた。

「美味しい……!!」

びっくりするほど美味しいカクテルだった。

滑らかな舌触りの中にある柔らかくも深い味わいと、癖になりそうな甘さ。

それは、カクテルというより、まるでどこか知らない異国のデザー

トのようだった。

「これ、何てカクテルなんですか？」

「アレキサンダーです。英国王エドワード7世とデンマーク王女アレクサンドラのご成婚祝いとして献上されたカクテルなんですよ」

そう聞いて、奏子の胸は一気に高鳴った。

「うわあ！そんなカクテルだったなんて！凄い！！」

まさしく自分のオーダーにぴったりのカクテルに、奏子はうっとり目を細めながらそれを飲みほした。

「美味しかったです。もう一杯、頂けますか？」

「かしこまりました」

バーテンはすぐにまたシェイカーを振り、同じカクテルを出してくれた。

このカクテルが幾らかは分からないが、今日は少しだけ自分を甘やかして贅沢をしたい。

さきほど見た光景を頭から追い出すように、奏子はカクテルを飲み続けた。

「ふう……」

何杯目かのカクテルを飲みほした時、奏子はもう随分と酔っていた。酔いの回ったふわふわとした頭で、ぼんやりと考える。

あの人が浮気するだなんて思ってもみなかった。こんな事なら、あ

の時プロポーズを受けるんじゃないかった。

夫、大知にプロポーズされる前、奏子は迷っていた。

何故なら奏子は当時、ふとしたきっかけで知り合ったある財閥の御曹司に告白されていたのだから。

ずっと幼馴染の位置から抜け出せない大知との仲に疲れ始めていた奏子にとって、その告白はあまりに甘い誘惑で、どうしようかと随分悩んだものだ。

そんな時、大知から告白と共に指輪を渡され、プロポーズされたのだ。

「あの頃に戻りたい……」

呟いて目を閉じ、グイッとカクテルを飲みほした。

## 第五話「夫婦」Part 2

「……………子……………奏子？」

誰かが自分を呼ぶ声がして、奏子は目を開けた。

「えっ!？」

そこにいたのは大知<sup>だいち</sup>だった。それも、今のではない。若かった、大  
学時代の  
大知!

どういう事!？」

奏子は驚きのあまり目を見張った。  
店の中にいた筈なのに、今奏子が立っているのは、さっきとは全く  
違う場所だった。  
思わずキョロキョロと辺りを見渡す。

「ここは、大学の教室!？」

「……………どうした?急に慌てて」

誰もいないだった広い教室の中、様子のおかしい奏子に、大地は気  
遣わしげに尋ねて来た。

奏子は戸惑いながら、思い切って尋ねてみた。

「あ……………えっと……………大知、だよな?」

「は?当たり前だろう。俺じゃなかったら誰だっというんだ?」

何を馬鹿な、と言わんばかりに大知は首を傾げた。

間違いない。目の前にいるのは、あの頃の、大学時代の太知だ。自分は夢を見ているのだろうか？奏子は目をしばたかせた。

「疲れてるのか？そういうえば、目が赤い。ちゃんと寝てないんじゃないのか？」

太知は心配そうに奏子を見つめた。その目に、奏子は懐かしそうに目を細めた。

ああ、そうだ。太知はいつだってこうやって私を気遣ってくれた。

そんな太知だから、奏子は彼を好きになったのだ。

けれど、そんな太知が、10数年後には奏子以外の女の人と楽しげに宝飾店を訪れたりするのだ。あの光景が頭をよぎり、奏子はたちまち居た堪れない気持ちになった。

途端に顔を曇らせた奏子に、ふいに太知は真剣な顔で言った。

「なあ奏子、お前さ、大河内おおこうちにプロポーズされたんだって？」

その言葉に、奏子はハツとした。

この会話、まさか……！！

「その顔……。やっぱりそうか。大河内から聞いたんだ。お前にプロポーズしたって。まさかかって思ったけど、本当だったんだな」

ふう〜と大きく溜め息を吐く大知に、奏子は確信した。

やっぱりだ。あの時と、同じ！

遠い思い出の中にあるそれと同じ会話が、目の前で繰り広げられている。

その時奏子は、同じ大学で経営学を専攻していた大河内財閥の御曹司、大河内 崇史（おほいうち たかし）に一目惚れしたのだと告白され、悩んでいた。

家柄も普通。見た目も普通。成績も人並みでしかないし、将来だつてきつと普通のサラリーマンになるだろう大知。だけど誰よりも優しくて、いつだって奏子の事を考えてくれる大知。ずっと一緒にいるのに、なかなか恋人にはなれない大知。

一方、家柄も見た目も最高に良い崇史。頭脳も明晰。将来は財閥を継ぐ事が決まっている。サークル活動で知り合つて以来猛烈にアプローチして来て、ついには奏子に正式に結婚前提で付き合つて欲しいと告白してきた崇史。

慣れ合いの関係で恋人にさえなれない大知より、告白してくれた崇史を選んだ方がずっと幸せなのかもしれない。そんな事を思いながらも、やっぱり大知への想いが捨てきれず、当時の奏子はろくに眠れなくなるほど悩んでいたのだ。

「で、奏子、お前、どう返事する気なんだ？」

あの時と同じ真剣な顔で聞く大知に、奏子は息を飲む。

「……どうって……その……」

言い淀む奏子に、大知は何かを考え込むように黙り込んだが、やがて決意したように口を開いた。

「……奏子、俺達さ、今までただの幼馴染で、これからもそれは変わらないって思ってた」

ゆっくりと、一つ一つ、丁寧に言葉を紡ぐ大知の目は、怖いくらい真剣だった。

「……だけどさ、アイツがお前にプロポーズしたって分かって俺、愕然とした。もうお前の傍にいられない。そう思ったら俺、堪らなくて……」

大知はそこで言葉を切った。奏子の肩を掴み、まっすぐにその瞳を射抜き、再び口を開く。

「お前が好きだ！他の誰にも渡したくない。俺と、結婚してくれ！」

あの時と同じ大知のプロポーズに、奏子の心臓はドキリと跳ね、胸いっぱい広がる甘い痺れに、思わず酔い知れそうになる。

けれど、そんな奏子の脳裏に、“あの光景”が蘇った。

どんなに嬉しくても、この先にある未来を思うと、どうしても素直に喜ぶ事が出来ない。

奏子は決意して口を開いた。

「……ごめん大知。私、大知の事はそんなふうに見れない」

嘘を吐いた。

これが夢でも、選ぶなら違う未来を選びたかった。

あんな想いはもう、したく、ない……。

奏子の心は、深い悲しみと痛みに支配されていた。大知への愛情を凌駕するほどりょうが。。。。

「……………そう…か……。分かった。ごめん、変な事言うて」

深く傷付いたような目で、それでも大知は笑顔を浮かべた。

その泣き笑いのような表情に、奏子は心臓をギュッと掴まれるような痛みを覚えた。

「ごめん……………」

「気にしないでいい。あ、もしアイツと結婚するつもりなら、俺もちゃんとお祝いする。気兼ねなんてしないでくれよ」

そう言って、くしゃりと奏子の頭を撫でた。

こうして奏子は、かつての自分とは違う道を選んだ。

夢ならいつか覚める。そう思っていたのに、いつまでたっても覚める事はなかった。

これは神様がくれたチャンスなのかもしれない。

そう思い、奏子は崇史へYESの返事をし、大学時代からの人生をやり直そうと決意した

あれは、夢だったのかな？

大知と結婚し、子供が生まれ、平凡な主婦として幸せだった筈の日々。

月日が過ぎていく中、奏子はいつしか、自分が長い夢を見ていたの

だと思うようになっていた。今の自分が現実なのだ、と。

奏子はそのまま崇史と婚約し、大学卒業と同時に式を挙げた。ついこの間まで大知の妻だった筈の自分が、今は崇史の妻として生きていく。

その事に違和感を感じつつも、新しい人生を歩み始めたのだった。

## 第五話「夫婦」Part・2（後書き）

< 作者より一言 >

第五話「夫婦」。もう少し続きます。

出来あがり次第UPしますので、また覗きにいらして頂けたら嬉しいです。

どうぞ宜しくお願い致します。

## 第五話「夫婦」Part 3

奏子そうこが崇史たかしと結婚して5年の月日が流れた。

二人の住まいは、実家の本宅とは別に崇史が建てた新築の豪邸である。

屋敷には常にメイドや執事が何人もいて、奏子は一切家事をする必要がなく、食事や服も豪華過ぎるほど豪華な物を何不自由なく与えられている。

しかし、財閥の社長夫人というのは、奏子が思っていたよりも相当にハードなものであった。

社交界に通用する徹底したマナーを勉強しなければならなかったし、他にもお茶やお華、英会話を初めとする様々な語学など、色々な教養を身に付けなければならなかった。もともと一般人である奏子に反感を持つ崇史の親族達を納得させる為には、社長夫人としてそれらの才覚が必要不可欠だったのだ。

当然、それらしい外見も求められ、奏子は日々エステサロンやジムに通い、美貌を磨く努力を義務付けられた。たとえ教養があっても、外見が一般人のそれと変わらないのでは、社交界で崇史が恥をかく事になりかねない。そう親族に言われた奏子は、崇史の為にもと必死で努力を重ねていく事で徐々に企業家の妻に相応しい才覚と美貌を身につけ、今ではどこの社交場に出ても恥ずかしくないと親族も認めるほどの妻となっていた。

「おかえりなさい崇史さん」

帰宅した夫である崇史に、奏子ははちきれんばかりの笑みを浮かべた。

「いや。これからまたロンドン支社へ向かわないといけないんだ」  
慌ただしく執事に荷物の手配を頼みながら言った崇史に、奏子は思わず目を伏せた。

「そうなんですか・・・。もう少しゆっくりして行って下さればよろしいのに」

「いつも寂しい思いをさせてしまって悪いね。しかしこれも会社の為には仕方ないんだよ。わかってくれ」

すまなそうに言う崇史に、奏子は寂しそうに笑顔を返した。

「ええ。わかってますわ。大丈夫。私の事は心配なならないで。どうか身体にだけは気を付けて下さいね」

そうして、慌ただしく屋敷を出て行く崇史を見送った奏子は、ふうと深い溜め息を吐いた。

もう何か月もろくに話も出来ていない。たまに帰宅したところで、いつもあのように一言二言言葉を交わすのみですぐにいなくなってしまう。

海外に幾つもの支社がある大規模な複合企業コングロマリットの社長である以上、それは仕方の無い事ではあるのだが。それでもやはり、結婚以来甘い蜜月を過ごせた事など数えるほどしか無いというのは、どうしても寂しいと思わずにはいられない。

親族や義理の両親達はこぞって早く後継ぎを、と奏子に迫っているが、それを相談する機会さえ持って貰えない事が、彼女の孤独をより色濃いものにしていた。

広い屋敷の中、奏子は一人、ただっ広い自室に戻ると、大きなベッ

ドに寝転び、溜め息を吐きながら思った。

(あの夢の中では、こんな寂しい思い、した事なかったのに)

未だ心の奥に残る、あの夢の記憶。幼馴染の大知と結婚し、息子の和樹かずきが生まれ、共働きでも愛に溢れ、幸せだった日々……。

奏子は、もうぼんやりとしか思い出せなくなり始めているその温かな記憶をなぞるように、そっと目を閉じた。三人で笑いあっていたあの日々は、夢だとわかっていてもあまりに優しく、温かった。

(ああ、あの日々に帰りたい……)

夢でも良い。もう一度、あの優しい家族に会いたかった。

もしあの時、崇史でなく大知を選んでいたら、あの夢のような温かい家庭が築けていたのだろうか。そう思うと、言いよの無い寂しさと後悔が胸に広がった。

大知にプロポーズされたあの時、自分は断ってしまったのか……。

あつ！

ふいに思い出した。あの大学の教室でプロポーズされた時、自分は夢の中で大知に浮気された事を思い出して、それが悲しくて断ったのだという事を。

そうだ。たしかあの時、夢の中の自分は仕事帰りに大知の浮気現場を見てしまい、シヨックで新宿のゴールデン街まで行き、そこにあった小さなBARでカクテルを飲んだ。その後……。

大学の、教室にいた。

何かがおかしい。大学の教室に立っていた筈の自分が、どうしてそんな夢を見ていたのか？

まさか！？

違和感の正体に思い当り、すぐにそんな事有り得ないと否定した。けれど……。

奏子はベッドから降り、外へ出かける支度を始めた。ある事を確かめる為に。

出かけた先は、新宿だった。

もしあれがただの夢なら、あの店がそこにある筈がない。けれど、もしあつたら？

胸の高鳴りが抑えきれず、奏子は速足で夢の記憶にあるあの店を指した。

「あ、あつた！！」

思わず歓声をあげた。

夢の記憶と同じその場所に、夢と同じあの店が、きちんと存在していたのである。

奏子は壊れそうに心臓が脈打つのを感じながら、その扉を開けた。

「いらっしやませ」

店内に入った途端、目に入ったバーテンの姿に、思わず声をあげそうになった。

そこにいたのは、あの夢と全く同じ人物だった！！

「どうなさいました？」

動かない奏子に、バーテンは優しく問いかけて来た。

「あ……な、何でもないです」

気持ちをなんとか落ち着かせ、奏子はその夢と同じ、バーテンの真正面の席へと座った。

あたりを見回すと、やはり店内はその夢と全く同じだった。

黒を基調としたモダンな造りの落ち着いた雰囲気、カウンターの奥にはピカピカに磨き上げられた綺麗なグラスや酒瓶が整然と並び、耳障りにならないジャズが静かに流れている。

「どうぞ」

温かいおしぼりと小さな口取りの器が前に差し出され、奏子はそのを受け取りながらゴクリと息を飲んだ。

「何に致しましょうか？」

にっこりと尋ねて来たバーテンに、奏子は少しだけ考えた。あの夢で飲んだ、甘いデザートみたいなあのカクテルは何と言ったか。思い出そうとしてみたが、どうしても思い出せない。仕方なくこう言ってみる事にした。

「あの、デザートみたいなカクテルってありますか？」

「デザートカクテルですね。かしこまりました」

バーテンは微笑み、琥珀色の瓶と生クリームのパックを取り出した。そのまま、柔らかな曲線を描く細いリキュール・グラスに、琥珀色の瓶の中身を静かに注いだかと思うと、その上から生クリームを静かにそそいだ。そしてその上に、ピンで刺した赤いチェリーを飾りつけると、コトリと奏子の前に差し出した。

「お待たせしました。エンジェル・ティップになります」

「エンジェル・ティップ？」

「ええ。『天使のこころづけ』という意味の、代表的なデザートカクテルです。どうぞ召し上がってみてください」

促され、奏子はおそるおそるグラスに口をつけた。

「………美味しい!!」

それは、あの夢の中で飲んだカクテルとはまた違う美味しさだった。口の中で、リキュールのほろ苦さと生クリームの柔らかさが混じり合い、滑らかな味わいを創り出している。

奏子は、その何とも言えない味わいを舌に感じながら、ゆっくりと目を閉じた。

もしかしたら………。そんな思いが、奏子の胸を去来していた。

第五話「夫婦」Part・3（後書き）

< 作者より >

第五話「夫婦」Part・3、いかがでしたか？

まだお話は続きます。

読者の皆様、どうか作者と共に奏子の想いの行方を見守って下さい  
ね

## 第五話「夫婦」Part・4

「……………子さん…奏子そごさん？」

ふいに響いた声に、奏子は目を開けた。

「あ……………！」

目の前には、いつの間にか奏子の夫、崇史たかしが立っていた。いつものように優しい目で、奏子を気遣わしげに見ている。けれど……………。

「崇…史……………さん……………？」

いつもの、仕事の為の整ったスーツ姿ではない。ポロシャツにジーンズという、およそどこにでもいそうな普通の格好をした彼に、奏子は目を見張った。

「どうし……………て……………？」

それは、彼が大学時代好んでいた服装だった。思わず周りを見渡す。もしかしたら……………。

「ここ、は……………！」

大学の、中だった。それも、奏子がよく利用していたサークルの、部室……………。

（まさか、そんな……………）

驚きと戸惑いが駆け巡る。もしかして、と思っではいた。あのBA Rのあのカクテルは、過去へ自分を戻してくれるのではないかと、と

「奏子さん、どうしたんです？僕の顔に何かついてますか？」

（奏子さん・・・懐かしい響き・・・）

怪訝けげんそうに自分の名を呼んだ彼に、奏子は目を細めた。

その声も口調も、いつもの夫、崇史と変わらない。けれど、やっぱり違う。この崇史は、奏子の夫である崇史ではない。“大学時代の”崇史なのだ。

結婚してからは“奏子”としか呼ばなくなっていた。無論、それだけで、奏子に対する態度が以前と変わったかと言えばそうではないのだが。

結婚してからだって、崇史は以前と変わらず奏子に優しくかった。ただ、あまりに忙しく、共に過ごす時間を持ってなくなっていただけで

「ねえ奏子さん、僕の事、嫌になりましたか？確かに僕は嘘を吐いてた。それが許せないというなら謝ります。ですが僕は、大河内の名ではなく、僕自身を見て欲しかった」

大学時代、身分を隠して密かに自分の本質を見てくれる女性を探していた崇史は、いつも飾らない格好をしていた。それでもその端正な容姿から、言い寄る女性は後を絶たず、片っぱしからそれを断るストイックさも相まって、その人気は凄まじいものになっていた。その崇史が、たかがサークルで一緒に活動していただけの奏子に告白し、打ち明けたのだ。

自分の本当の身分、そして、奏子を真剣に想っていると云う事を。

「……違うわ。隠しごとをされていたのは、確かに少しシヨックだったけど、私はそんな事で貴方の事を嫌になったりしないもの」  
「だったら……」

何が問題なのか。

それはこの状況だ。奏子が戻りたかったのは崇史にプロポーズの返事をした“この時”ではない。この直前、教室で幼馴染の大知だいちに告白された“あの時”なのだから。  
思い煩い、うつむいたままの奏子の肩を、ふいに崇史が掴んだ。

「奏子さん！お願いだ！僕は貴女の人を思いやる心遣い、飾らない美しさが好きだ。他の誰でもない、貴女だから好きなんだ！」

「っ……！」

分かってはいた。それでも、いざ思い出と同じ告白をされると、奏子の心は揺れた。

このまま、受け入れてしまえばいいのかもしれない。自分はもう、大知を振ってしまっているのだから。でも……。

「ごめんなさい崇史さん、私……」

言葉を詰まらせた奏子に、崇史はゆっくりと問いかける。

「……大知さん……ですか？」

「……どうして……」

驚き顔を上げた奏子に、崇史は寂しげに微笑んだ。

「分かりますよ。だって僕は、いつだって貴女を見てましたから」

「あ……………」

思わず声を失った奏子に、崇史は優しく微笑む。

「行ってあげて下さい。彼はきつと、今頃、高松教授の研究室にいます。僕が頼まれた仕事を、彼が引き受けてくれたんです。こうして貴女と過ごせるように、ね……………」

そうだった。確かに大学時代のこの時を境に、普段は教授の研究発表の手伝いでなかなか手を離せない筈の崇史が、それでも週に一度は夜まで時間を作ってくれるようになっていた。奏子の為に。

「この人はどんなに忙しくても、自分の為に時間を作ってくれる人なんだ」

その心遣いがあまりにも嬉しくて、奏子は表面だけでなく、心から崇史を愛そうと決めたのだった。それがまさか、大知のお陰だったとは……………。

「ごめんなさい崇史さん、私……………」

「謝らないで。それより、お願いがあるんです。これから先も、僕と友人でいてくれますか？」

失恋は仕方ないが、友人まで失うのは堪える、という崇史の言葉に、奏子は涙が出そうになりながら、それでも何とか微笑み頷いた。

「……………ええ。ありがとう崇史さん。私、行きます」

崇史は頷き、にっこりと微笑み返した。

「いってらっしゃい。大知さんに伝えて下さい。ありがとうございます」と  
優しい笑みに見送られ、奏子は走った。

大知、大知！！

もう迷いは無かった。目的の研究室に着いた時、奏子はすっかり心を決めていた。

もう一度、やり直そう。今度こそ、大知と！

扉を開けた瞬間、中にいる白衣の彼が目に入った。

「奏子！？お前、なんでここに……」

「ごめん大知！私、ホントは」

スツと歩み寄り、懐かしい幼馴染の目を見つめる。

がっしりしたその肩も、人懐っこい優しい目も、間違いなくあの頃と同じ、奏子が好きだったその人のものだ。

奏子は、精一杯背伸びした。自分の想いを伝える為に。

「っ！！」

幼馴染の目が驚きに見開かれ、その腕が奏子の背に回った。  
たくましい腕の中、唇を離れた奏子は囁いた。

「大好き」

瞬間、今度は彼の方から唇を塞がれ、奏子はそっと目を閉じ、その温かさに身を委ねた。

## 第五話「夫婦」Part・4（後書き）

< 作者より一言 >

第五話「夫婦」Part・4、いかがでしたか？

次回Part・5ではいよいよ第五話の最終回となります。

また出来あがり次第投稿しますので、宜しければまたご覧になって頂けたら嬉しいです。

宜しくお願い致します。

## 第五話「夫婦」Part・5

痺れるような甘い感覚の中、突然グラリと激しい眩暈のようなものを覚えた奏子は、思わず驚いて目を開けた。

「えっ!？」

さきほどまで目の前にいた筈の愛する幼馴染の姿はそこには無く、代わりに目に映ったのは、カウンターの奥でグラスを磨くバーテンの姿だった。

慌てて周囲をキョロキョロ見渡すと、そこは元いたあのBARの店内だと分かった。

奏子は混乱する頭を必死に働かせて考えた。

あれは、夢？

酒に酔って見た白昼夢だったのだろうか。

幼馴染である大知の告白を断り、財閥の御曹司である崇史と結婚して過ごした日々。そして、もう一度過去に戻って大知に告白した、

あの研究室でのキス……。

どこからどこまで夢だったのだろうか？

空になったグラスを見て、そんな事を思ったその時だった。

P i r r i r r i r r i . . . !

バッグに入れたままの携帯電話が鳴り出し、奏子は慌てて電話を取り出した。

大知!？

ディスプレイに表示された名前は、確かに愛する幼馴染の名前だった。

奏子は躊躇いながら通話ボタンを押した。

「も……もしもし」

『奏子？ごめん、まだ仕事？』

聞こえて来る声は、間違いなく聞きなれた幼馴染のそれであり、思わず胸が高鳴った。

奏子は早くなる胸の鼓動を感じながら、躊躇いがちに答えた。

「……うん。仕事はもう終わってる。今はちよっと、一人で飲んでるだけ」

『そうか。今どこ？和樹かずきはもう寝たし、迎えに行くよ』

それを聞き、奏子はようやく安心した。やっぱり自分は大知の妻で、息子の和樹もちゃんと存在しているのだ。

奏子は嬉しさで胸がいっぱいになりながら、今自分がいる場所を大知に伝えた。

すると大知は、ならそこで待っていて欲しいと言って電話を切った。その瞬間、奏子の胸に喜びと悲しみが入り混じった複雑な思いがよぎった。

今までの全てがただの夢だったとして、では大知が浮気していたあの場面は夢だったのか、それとも現実だったのか。

もし夢なら、それほど嬉しい事はない。けれど、こうして一人B A Rにいる現状は、あの悪夢のような出来事が現実だったのではないかという恐怖を感じさせる。

もし本当に浮気されていたら、一体自分はどうしたらいいのか。そんな思いが奏子の心を支配していた。

キィイ

BARの入口の扉が音を立てて開いたのは、それから1時間ほど後の事だった。

「遅くなってごめん」

扉を開けて入って来た大知を、奏子は陽気な口調で迎えた。

「遅いよ、もう。おかげですっかり酔っちゃったよ」

「奏子、お前、随分飲んだんだな。大丈夫か？」

心配そうに問いかける大知に、奏子はその大きな目を潤ませた。

「……うん」

「まったく。一体どうしたんだ？お前が家に帰らないで一人で飲みに来るなんて」

何かあったのか？

心配そうに尋ねる大知に、奏子は思わずボロボロ涙を零した。

「だって……」

奏子は言葉を詰まらせた。どう聞けばいいのだろうか？もしかして今

日、宝石店にいた？と聞けばいいのか？それとも、浮気したの？とストリートに言えばいいのか？

躊躇う奏子を前に、大知は隣に腰掛け、心配そうな顔で奏子の涙を拭いた。

「奏子、何があつたか知らないけど、俺で良かったら聞かよ。話してみな」

幼い頃からずっと変わらない優しい口調と瞳がそこにある。

それがまた堪らなくて、奏子は泣きながらようやく声を出した。

「……あのね大知、私、見ちゃったの」

「見たつて、何を？」

思いきつて、あの宝石店で見た事を話した。すると大知は「まいったな」と頭を掻いた。

「あれを見られてたなんて、思わなかった」

気まずそうな大知に、奏子は胸が張り裂けそうな思いだった。「見間違いだよ」という否定の言葉を期待していた気持ちは、一気に裏切られてしまったのだ。

絶望する奏子を前に、大知は苦笑しながら言葉を続けた。

「まあ、見られてたなら仕方ない。本当はもう少し後にするつもりだったんだけど……」

そう言つて、大知はポケットから小さなビロードの箱を取り出した。

「え？」

驚く奏子の前で、大知はその箱を開け、中から美しく輝くダイヤモンドの指輪を取り出した。

「これ、お前にプレゼント。今日、結婚記念日だろ？」

「大知……だって、あの女の人？」

戸惑う奏子に、大知は恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべた。

「ああ、あれは俺の部下。女房に指輪を贈りたいんだけど、何をあげていいかわからないんだって言ったら、一緒に選んでくれるって言うからお願いしたんだけど……」

まさか現場を見られて誤解されるとは思わなかったと、バツが悪そうに言った。

「じゃあ、全部私の勘違い？」

「そう。誤解させちゃって悪かった。ごめんな」

そう言っつて、大知は奏子の左手をとった。

「結婚する時には貧乏学生だったからやれなかったけど、今ここで誓うよ。俺は奏子を妻とし、一生愛すると誓います」

スツと薬指に指輪が嵌められた。

「愛してる」

「私も……………」

そつと唇を重ね、奏子は喜びの涙を流したのだった。

そんな二人を、バーテンは穏やかな微笑みで見つめていた。

ここは幸せ一丁目。

今日も店には、幸せが溢れている…………。

## 第五話「夫婦」Part・5（後書き）

### マスターのカクテル講座 第5回

#### 「アレキササンダー」

材料：ブランデー（30ml）、クレーム・ド・カカオ（15ml）、生クリーム（15ml）

作り方：材料をシェイカーに入れる。十分にシェイクする。カクテル・グラスに注ぐ。ナツメグ（好みで良い）を振りかける。

特徴：英国王室の御成婚祝いに王妃に捧げられた献上品であったこのカクテルだが、いつの間にか男性の名前に変化して知られるように。映画「酒とバラの日々」に出てくる事でも有名。ブランデーの割合を調節する事で甘口に仕上げる事が可能。女性にも受けがいいが、飲みすぎ注意のカクテル。

#### 「エンジェル・ティップ」

材料：クレーム・ド・カカオ（3/4）、生クリーム（1/4）

作り方：リキュール・グラスにクレーム・ド・カカオを注ぐ。その上から生クリームを混ざらないようゆっくり注ぐ。チェリーを刺したピンをグラスの真ん中に渡すようにして飾る。

特徴：最も代表的と言われる有名なデザートカクテル。ピンに刺した赤いチェリーがエンジェル・ティップ（天使の心づけ）と言われる由縁である。日本ではエンジェル・キッスと呼ばれる事も多いが、

それは本来全く別のスタイルのカクテルらしい。チョコレートドリンクのような甘味と生クリームのはらかなさのコラボは、まさにデザート感覚といえるだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5666n/>

---

ここは幸せ一丁目

2010年10月28日01時03分発行